

池田泉州ホールディングス

CONTENTS

主要な経営指標等の推移	23
リスク管理債権	23
連結財務諸表	
連結貸借対照表	24
連結損益計算書	25
連結包括利益計算書	25
連結株主資本等変動計算書	26
連結キャッシュ・フロー計算書	28
セグメント情報等	36
自己資本の充実の状況等	
自己資本の構成に関する事項	37
定性的な開示事項	39
定量的な開示事項	46
報酬等に関する開示事項	54

会計監査人の監査の状況

1. 当社は、会社法第444条第4項の規定に基づき、平成24年4月1日から平成25年3月31日までの連結会計年度及び平成25年4月1日から平成26年3月31日までの連結会計年度の連結貸借対照表、連結損益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結注記表について、新日本有限責任監査法人の監査を受けております。
2. 当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、前連結会計年度（自平成24年4月1日至平成25年3月31日）及び当連結会計年度（自平成25年4月1日至平成26年3月31日）の連結財務諸表について、新日本有限責任監査法人の監査を受けております。

最近5連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
		自 平成21年4月 1日 至 平成22年3月31日	自 平成22年4月 1日 至 平成23年3月31日	自 平成23年4月 1日 至 平成24年3月31日	自 平成24年4月 1日 至 平成25年3月31日	自 平成25年4月 1日 至 平成26年3月31日
連結経常収益	百万円	118,332	117,255	115,952	111,558	104,855
連結経常利益	百万円	6,057	7,532	10,905	12,806	17,551
連結当期純利益 (△は連結当期純損失)	百万円 △	2,845	7,690	3,810	10,102	16,604
連結包括利益	百万円	—	7,977	4,995	30,132	9,201
連結純資産額	百万円	174,276	176,684	163,311	185,389	196,397
連結総資産額	百万円	4,977,656	4,881,152	4,992,667	4,994,458	5,349,776
連結自己資本比率（国内基準）	%	10.21	10.80	10.92	10.39	10.49

(注) 1. 当社及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、主として税抜方式によっております。

2. 連結自己資本比率は、平成24年度まで銀行法第52条の25の規定に基づく改正前の平成18年金融庁告示第20号に定められた算式に基づき、平成25年度より銀行法第52条の25の規定に基づく改正後の平成18年金融庁告示第20号に定められた算式に基づき、それぞれ算出しております。当社は、国内基準を採用しております。

リスク管理債権

		平成25年3月期末	平成26年3月期末
破綻先債権額	百万円	5,355	4,000
延滞債権額	百万円	68,436	62,173
3カ月以上延滞債権額	百万円	14	—
貸出条件緩和債権額	百万円	14,349	6,706
リスク管理債権合計	百万円	88,156	72,881
貸出金合計	百万円	3,578,225	3,602,329
リスク管理債権比率	%	2.46	2.02

(注) 1. 破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

2. 延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. リスク管理債権合計＝破綻先債権額＋延滞債権額＋3カ月以上延滞債権額＋貸出条件緩和債権額

連結貸借対照表

(単位：百万円)

科 目	前連結会計年度末 (平成25年3月31日)	当連結会計年度末 (平成26年3月31日)
(資産の部)		
現金預け金	100,867	215,658
コールローン及び買入手形	5,603	775
買入金銭債権	956	1,128
商品有価証券	108	122
金銭の信託	19,000	27,000
有価証券 ※1,8,14	1,169,201	1,375,525
貸出金 ※2,3,4,5,6,7,9	3,578,225	3,602,329
外国為替 ※6	4,376	5,529
その他資産 ※8	73,975	61,282
有形固定資産 ※10,11	38,105	38,447
建物	16,213	16,644
土地	15,868	15,804
リース資産	23	30
建設仮勘定	—	0
その他の有形固定資産	6,000	5,966
無形固定資産	7,617	8,045
ソフトウェア	6,796	6,254
のれん	—	856
その他の無形固定資産	820	934
退職給付に係る資産	—	6,496
繰延税金資産	29,478	26,366
支払承諾見返	21,758	19,992
貸倒引当金	△ 54,814	△ 38,923
資産の部合計	4,994,458	5,349,776
(負債の部)		
預金 ※8	4,490,736	4,580,769
債券貸借取引受入担保金 ※8	124,915	315,691
借入金 ※8,12	71,909	118,517
外国為替	208	366
社債 ※13	50,000	70,000
その他負債 ※8	42,239	45,146
賞与引当金	1,708	1,678
退職給付引当金	4,511	—
退職給付に係る負債	—	120
役員退職慰労引当金	136	62
睡眠預金払戻損失引当金	315	328
ポイント引当金	163	170
偶発損失引当金	393	379
特別法上の引当金	—	0
繰延税金負債	68	151
負ののれん	5	2
支払承諾	21,758	19,992
負債の部合計	4,809,069	5,153,379
(純資産の部)		
資本金	72,311	79,811
資本剰余金	62,235	59,251
利益剰余金	35,431	46,949
自己株式	△ 1,350	△ 728
株主資本合計	168,627	185,284
その他有価証券評価差額金	7,808	△ 147
繰延ヘッジ損益	0	1
退職給付に係る調整累計額	—	1,020
その他の包括利益累計額合計	7,809	875
新株予約権	63	68
少数株主持分	8,888	10,168
純資産の部合計	185,389	196,397
負債及び純資産の部合計	4,994,458	5,349,776

連結損益計算書

(単位：百万円)

科 目	前連結会計年度		当連結会計年度	
	自	平成24年4月1日 至 平成25年3月31日	自	平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
経常収益		111,558		104,855
資金運用収益		64,383		60,870
貸出金利息		54,701		51,103
有価証券利息配当金		9,470		9,459
コールローン利息及び買入手形利息		81		76
預け金利息		17		33
その他の受入利息		112		198
役務取引等収益		17,900		19,784
その他業務収益		16,543		6,933
その他経常収益		12,730		17,267
偶発損失引当金戻入益		—		12
償却債権取立益		1,419		1,634
その他の経常収益		11,310		15,620
経常費用		98,752		87,303
資金調達費用		9,394		8,806
預金利息		6,769		6,203
譲渡性預金利息		0		0
コールマネー利息及び売渡手形利息		1		1
債券貸借取引支払利息		554		568
借用金利息		944		866
社債利息		1,090		1,112
その他の支払利息		33		54
役務取引等費用		5,307		5,672
その他業務費用		7,290		6,592
営業経費		54,460		52,582
その他経常費用		22,298		13,650
貸倒引当金繰入額		7,878		745
その他の経常費用 ^{*1}		14,419		12,904
経常利益		12,806		17,551
特別利益		491		2,294
固定資産処分益		—		0
負のれん発生益		491		3
退職給付信託設定益		—		2,291
特別損失		99		192
固定資産処分損		74		58
減損損失		25		22
持分変動損失		—		112
税金等調整前当期純利益		13,197		19,653
法人税、住民税及び事業税		998		889
法人税等調整額		1,784		1,631
法人税等合計		2,783		2,521
少数株主損益調整前当期純利益		10,414		17,132
少数株主利益		312		527
当期純利益		10,102		16,604

連結包括利益計算書

(単位：百万円)

科 目	前連結会計年度		当連結会計年度	
	自	平成24年4月1日 至 平成25年3月31日	自	平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
少数株主損益調整前当期純利益		10,414		17,132
その他の包括利益 ^{*1}		19,717		△ 7,930
その他有価証券評価差額金		19,714		△ 7,931
繰延ヘッジ損益		2		0
包括利益		30,132		9,201
(内訳)				
親会社株主に係る包括利益		29,792		8,649
少数株主に係る包括利益		340		551

連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度(自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	72,311	72,675	30,910	△ 1,944	173,952
当期変動額					
合併による増加			3		3
剰余金の配当			△ 5,585		△ 5,585
当期純利益			10,102		10,102
自己株式の取得				△ 10,369	△ 10,369
自己株式の処分		△ 73		596	523
自己株式の消却		△ 10,366		10,366	—
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△ 10,439	4,520	593	△ 5,325
当期末残高	72,311	62,235	35,431	△ 1,350	168,627

	その他の包括利益累計額			新株予約権	少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	その他の包括 利益累計額合計			
当期首残高	△ 11,878	△ 2	△ 11,880	62	1,177	163,311
当期変動額						
合併による増加						3
剰余金の配当						△ 5,585
当期純利益						10,102
自己株式の取得						△ 10,369
自己株式の処分						523
自己株式の消却						—
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）	19,686	2	19,689	1	7,711	27,402
当期変動額合計	19,686	2	19,689	1	7,711	22,077
当期末残高	7,808	0	7,809	63	8,888	185,389

当連結会計年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	72,311	62,235	35,431	△ 1,350	168,627
当期変動額					
新株の発行	7,500	7,500			15,000
合併による増加			131		131
剰余金の配当			△ 5,208		△ 5,208
当期純利益			16,604		16,604
自己株式の取得				△ 10,390	△ 10,390
自己株式の処分		△ 96		624	528
自己株式の消却		△ 10,387		10,387	—
連結範囲の変動			△ 8		△ 8
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	7,500	△ 2,983	11,518	622	16,657
当期末残高	79,811	59,251	46,949	△ 728	185,284

	その他の包括利益累計額				新株予約権	少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計			
当期首残高	7,808	0	—	7,809	63	8,888	185,389
当期変動額							
新株の発行							15,000
合併による増加							131
剰余金の配当							△ 5,208
当期純利益							16,604
自己株式の取得							△ 10,390
自己株式の処分							528
自己株式の消却							—
連結範囲の変動							△ 8
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）	△ 7,955	0	1,020	△ 6,933	4	1,280	△ 5,648
当期変動額合計	△ 7,955	0	1,020	△ 6,933	4	1,280	11,008
当期末残高	△ 147	1	1,020	875	68	10,168	196,397

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	自	平成24年4月1日 至 平成25年3月31日	自	平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
営業活動によるキャッシュ・フロー				
税金等調整前当期純利益		13,197		19,653
減価償却費		5,004		4,656
減損損失		25		22
のれん償却額		84		133
負ののれん償却額	△	2	△	2
負ののれん発生益	△	491	△	3
持分法による投資損益 (△は益)	△	1	△	29
貸倒引当金の増減 (△)		6,510	△	15,890
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△	41	△	29
退職給付信託設定損益 (△は益)		—	△	2,291
退職給付に係る資産の増減 (△は増加)		—	△	1,538
退職給付に係る負債の増減 (△は減少)		—		12
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	△	3		—
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△	198	△	74
睡眠預金払戻損失引当金の増減 (△)		56		13
ポイント引当金の増減額 (△は減少)		22		7
偶発損失引当金の増減 (△)	△	79	△	13
資金運用収益	△	64,383	△	60,870
資金調達費用		9,394		8,806
有価証券関係損益 (△)	△	7,269	△	5,060
金銭の信託の運用損益 (△は運用益)		64		219
為替差損益 (△は益)	△	20,465	△	31,497
固定資産処分損益 (△は益)		74		57
貸出金の純増 (△) 減	△	62,082	△	24,104
預金の純増減 (△)		100,282		90,033
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)		8,645		46,608
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減	△	2,500	△	3,836
商品有価証券の純増 (△) 減	△	39	△	14
コールローン等の純増 (△) 減	△	4,366		4,655
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	△	112,392		190,776
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	△	47	△	1,153
外国為替 (負債) の純増減 (△)	△	223		157
資金運用による収入		65,857		61,215
資金調達による支出	△	11,219	△	10,313
その他		102		8,300
小計	△	76,486		278,607
法人税等の支払額	△	908	△	1,255
営業活動によるキャッシュ・フロー	△	77,395		277,352
投資活動によるキャッシュ・フロー				
有価証券の取得による支出	△	1,056,879	△	1,123,362
有価証券の売却による収入		830,989		291,683
有価証券の償還による収入		287,658		660,551
金銭の信託の増加による支出	△	205	△	8,612
金銭の信託の減少による収入		135		381
有形固定資産の取得による支出	△	2,689	△	2,733
無形固定資産の取得による支出	△	668	△	1,500
有形固定資産の売却による収入		27		56
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出 ※2		—	△	2,400
資産除去債務の履行による支出	△	22		—
投資活動によるキャッシュ・フロー		58,346	△	185,936
財務活動によるキャッシュ・フロー				
株式の発行による収入		—		15,000
劣後特約付借入れによる収入		7,000		—
劣後特約付借入金の返済による支出	△	13,500		—
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の発行による収入		—		20,000
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による支出	△	3,000		—
少数株主からの払込みによる収入		8,000		—
配当金の支払額	△	5,585	△	5,208
少数株主への配当金の支払額	△	19	△	247
自己株式の取得による支出	△	10,369	△	10,390
自己株式の処分による収入		596		624
財務活動によるキャッシュ・フロー	△	16,877		19,778
現金及び現金同等物に係る換算差額		291	△	239
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△	35,634		110,955
現金及び現金同等物の期首残高		130,996		95,361
現金及び現金同等物の期末残高 ※1		95,361		206,317

注記事項

(平成26年3月期)

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社 30社
- | 会社名 | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 株式会社池田泉州銀行 | 池田泉州T T証券株式会社 |
| 池田泉州ターンアラウンド・パートナーズ株式会社 | 池田泉州コーポレート・パートナーズ株式会社 |
| 池田泉州リース株式会社 | 泉銀総合リース株式会社 |
| 池田泉州信用保証株式会社 | 近畿信用保証株式会社 |
| 株式会社池田泉州JCB | 株式会社ディーアイ |
| 株式会社池田泉州VC | 池田泉州キャピタル株式会社 |
| 池田泉州ビジネスサービス株式会社 | 池田泉州オフィスサービス株式会社 |
| 池田泉州モーゲージサービス株式会社 | 池田泉州システム株式会社 |
| 池田泉州投資顧問株式会社 | 池田泉州ファイナンス株式会社 |
| 池銀キャピタルニュービジネスファンド2号投資事業有限責任組合 | |
| 池銀キャピタルニュービジネスファンド3号投資事業有限責任組合 | |
| 池田泉州キャピタルニュービジネスファンド4号投資事業有限責任組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンド2号投資事業有限責任組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンド3号投資事業有限責任組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンドK G I 投資事業組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンドD・I 投資事業組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンドP C I 投資事業有限責任組合 | |
| 池銀キャピタル夢仕込ファンドK I 投資事業有限責任組合 | |
| 池田泉州キャピタル事業承継ファンド絆投資事業有限責任組合 | |
| 池田泉州キャピタル夢仕込ファンドO I 投資事業有限責任組合 | |
| J S企業育成ファンド投資事業有限責任組合 | |

(連結の範囲の変更)

池田泉州T T証券株式会社は株式の取得により、池田泉州キャピタルニュービジネスファンド4号投資事業有限責任組合は新規設立により、それぞれ当連結会計年度より連結の範囲に含めております。
前連結会計年度において連結子会社であった株式会社ジェーアイ(現商号 株式会社池田泉州JCB)と株式会社泉州カードは、平成25年7月1日に株式会社ジェーアイを存続会社として合併いたしました。
前連結会計年度において連結子会社であった池銀キャピタルニュービジネスファンド1号投資事業有限責任組合は清算が終了したため、連結の範囲から除外しております。

(2) 非連結子会社

該当ありません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

(2) 持分法適用の関連会社 3社

会社名
株式会社自然総研
株式会社バンク・コンピュータ・サービス
株式会社ステーションネットワーク関西

(3) 持分法非適用の非連結子会社

該当ありません。

(4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。

12月末日	12社
3月末日	18社

(2) 連結子会社のうち、決算日が連結決算日と異なる子会社については、各社の決算日の財務諸表により連結しております。なお、連結決算日との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

(イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他の有価証券については原則として連結決算日の市場価格等(株式及び投資信託については連結決算日前1カ月の市場価格等の平均)に基づき時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(ロ) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

①有形固定資産(リース資産を除く)
当社及び連結子会社の有形固定資産は、主として定額法を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建 物 3年~50年
その他 2年~20年

②無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。

③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

銀行業を営む連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

銀行業以外の連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は62,365百万円であります。

(6) 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(7) 役員退職慰労引当金の計上基準

役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(8) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(9) ポイント引当金の計上基準

ポイント引当金は、ポイントの将来の利用による負担に備えるため、未利用の付与済ポイントを金額に換算した残高のうち、将来利用される見込額を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(10) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(11) 特別法上の引当金の計上基準

特別法上の引当金は、池田泉州T T証券株式会社が計上した金融商品取引責任準備金0百万円であり、有価証券の売買その他の取引等に関して生じた事故による損失の補填に充てるため、金融商品取引法第46条の5及び金融商品取引業等に関する内閣府令第175条の規定に定めるところにより算出した額を計上しております。

(12) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については期間定額基準によっております。また、過去勤務費用、数理計算上の差異及び会計基準変更時差異の費用処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用:

その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年~12年)による定額法により損益処理

数理計算上の差異:

各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年~12年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生時の翌連結会計年度から損益処理

会計基準変更時差異(9,894百万円):

15年による按分額を費用処理しております。

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(13) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

連結子会社の外貨建資産及び負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(14) リース取引の処理方法

(借手側)

連結子会社の所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する連結会計年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。

(貸手側)

ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準については、リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

なお、リース取引開始日が適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、期首に前連結会計年度末における固定資産の減価償却累計額控除後の額で契約したものとしております。

(15) 重要なヘッジ会計の方法

(イ) 金利リスク・ヘッジ

銀行業を営む連結子会社の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号。以下「業種別監査委員会報告第24号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。

また、一部の連結子会社において、金利スワップの特例処理を行っております。

(ロ) 為替変動リスク・ヘッジ

銀行業を営む連結子会社の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

(16) のれんの償却方法及び償却期間

5年間の定額法により償却を行っております。

(17) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(18) 消費税等の会計処理

当社及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、主として税抜方式によっております。

(19) 連結納税制度の適用

当社及び一部の連結子会社は法人税法(昭和40年法律第34号)に規定する連結納税制度を適用しております。

(会計方針の変更)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日。以下「退職給付適用指針」という。)を、当連結会計年度末より適用し(ただし、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めを除く)、退職給付債務から年金資産の額を控除した額を退職給付に係る負債として計上しております。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度末において、税効果調整後の未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用をその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額として計上しております。

この結果、当連結会計年度末において、退職給付に係る資産が6,496百万円、退職給付に係る負債が120百万円計上されております。また、繰延税金資産が564百万円減少し、その他の包括利益累計額が1,020百万円増加しております。

なお、1株当たり情報に与える影響は当該箇所に記載しております。

(未適用の会計基準等)

退職給付会計基準等(平成24年5月17日)

(1) 概要

当該会計基準等は、財務報告を改善する観点及び国際的な動向を踏まえ、未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の処理方法、退職給付債務及び勤務費用の計算方法並びに開示の拡充を中心に改正されたものであります。

(2) 適用予定日

当社は、退職給付債務及び勤務費用の計算方法の改正については、平成26年4月1日に開始する連結会計年度の期首から適用する予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

当該会計基準等の適用による影響は、平成26年4月1日に開始する連結会計年度の期首における利益剰余金が466百万円増加する予定です。

(連結貸借対照表関係)

※1. 関連会社の株式の総額

株式 265百万円

※2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

破綻先債権額 4,000百万円

延滞債権額 62,173百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

※3. 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

3カ月以上延滞債権額 100百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

※4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

貸出条件緩和債権額 6,706百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

※5. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

合計額 72,881百万円

なお、上記2.から5.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

※6. 手形割引は、業種別監査委員会報告第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

18,686百万円

※7. ローン・パーティシパーションで、「ローン・パーティシパーションの会計処理及び表示」(日本公認会計士協会会計制度委員会報告第3号)に基づいて、原債務者に対する貸出金として会計処理した参加元本金額のうち、連結貸借対照表計上額は次のとおりであります。

15,600百万円

※8. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産

有価証券 488,918百万円

その他資産 1,069百万円

計 489,987百万円

担保資産に対応する債務

預金 14,537百万円

債券貸借取引受入担保金 315,691百万円

借入金 54,222百万円

その他負債 205百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

有価証券 34,982百万円

また、その他資産には、先物取引差入証拠金、保証金、先物取引負担金及び金融商品等差入担保金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

先物取引差入証拠金 3,076百万円

保証金 5,263百万円

先物取引負担金 503百万円

金融商品等差入担保金 1,200百万円

※9. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

融資未実行残高 659,510百万円

うち原契約期間が1年以内のもの

(又は任意の時期に無条件で取消可能なもの) 648,268百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※10. 有形固定資産の減価償却累計額

減価償却累計額 43,656百万円

※11. 有形固定資産の圧縮記帳額

圧縮記帳額 517百万円

(当連結会計年度の圧縮記帳額) (100百万円)

※12. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

劣後特約付借入金 25,000百万円

※13. 社債は、劣後特約付無担保社債であります。

※14. 有価証券中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

7,879百万円

(連結損益計算書関係)

※1. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

貸出金償却 3,984百万円

債権譲渡損 119百万円

株式等償却 104百万円

株式等売却損 480百万円

金銭の信託運用損 603百万円

保証協会負担金 192百万円

社債発行費用 120百万円

(連結包括利益計算書関係)

※1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金	
当期発生額	△3,107百万円
組替調整額	△3,823百万円
税効果調整前	△6,931百万円
税効果額	△999百万円
その他有価証券評価差額金	△7,931百万円
繰延ヘッジ損益	
当期発生額	△43百万円
組替調整額	42百万円
税効果調整前	△0百万円
税効果額	0百万円
繰延ヘッジ損益	0百万円
その他の包括利益合計	△7,930百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計 年度末株式数	摘 要
発行済株式					
普通株式	238,458	—	—	238,458	
第一種優先株式	7,400	—	7,400	—	注1
第二種優先株式	23,125	—	—	23,125	
第三種優先株式	—	7,500	—	7,500	注2
合計	268,983	7,500	7,400	269,083	
自己株式					
普通株式	2,352	4	1,088	1,269	注3、4
第一種優先株式	—	7,400	7,400	—	注5、6
合計	2,352	7,404	8,488	1,269	

- (注) 1. 第一種優先株式の発行済株式の減少7,400千株は、自己株式の消却であります。
2. 第二種優先株式の発行済株式の増加7,500千株は、第三者割当による新株の発行であります。
3. 普通株式の自己株式の増加4千株は、単元未満株式の買取による取得であります。
4. 普通株式の自己株式の減少1,088千株は、単元未満株式の買取請求による処分0千株、ストック・オプションの権利行使による譲渡45千株及び池田泉州銀行従業員持株会への譲渡1,043千株によるものであります。
5. 第一種優先株式の自己株式の増加7,400千株は、取締役会決議に基づく自己株式の取得であります。
6. 第一種優先株式の自己株式の減少7,400千株は、取締役会決議に基づく自己株式の消却であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計年度末残高(百万円)	摘要
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少		
当社	ストック・オプションとしての新株予約権		—			68	

3. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成25年6月26日 定時株主総会	普通株式	3,574	15	平成25年3月31日	平成25年6月27日
	第一種優先株式	392	980を18.5で除した額	平成25年3月31日	平成25年6月27日
	第二種優先株式	1,275	1,020を18.5で除した額	平成25年3月31日	平成25年6月27日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成26年6月27日 定時株主総会	普通株式	3,575	その他利益剰余金	15	平成26年3月31日	平成26年6月30日
	第二種優先株式	1,275	その他利益剰余金	1,020を18.5で除した額	平成26年3月31日	平成26年6月30日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	215,658百万円
当座預け金	△1,008百万円
普通預け金	△3,318百万円
通知預け金	△30百万円
定期預け金	△4,085百万円
外貨預け金	△71百万円
振替貯金	△428百万円
その他預け金	△400百万円
現金及び現金同等物	206,317百万円

※2. 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳株式の取得により新たに池田泉州T T証券株式会社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の主な内訳並びに同社株式の取得価額と同社取得のための支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	3,219百万円
固定資産	219百万円
のれん	951百万円
流動負債	△1,022百万円
固定負債	△2百万円
少数株主持分	△965百万円
株式の取得価額	2,400百万円
現金及び現金同等物	一百万円
差引：取得のための支出	2,400百万円

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引
重要性が乏しいため記載を省略しております。
2. オペレーティング・リース取引
オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料
- | | |
|-----|----------|
| 1年内 | 691百万円 |
| 1年超 | 5,313百万円 |
| 合計 | 6,004百万円 |

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、池田泉州銀行を中心に、地域金融機関として各種金融サービスに係る事業を行っています。主たる業務である預金業務、貸出業務ならびに有価証券運用等のマーケット業務において、金利変動及び市場価格の変動を伴う金融資産及び金融負債を有しています。市場環境等の変化に応じた戦略目標等の策定に資するため、これらの資産及び負債の総合的管理(ALM)を行うとともに、その一環として、デリバティブ取引を行っています。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスク及び金利の変動リスクに晒されています。

また、保有有価証券は、主に株式、債券、投資信託等であり、その他有価証券として、純投資目的及び政策投資目的で保有しているほか、一部は満期保有目的の債券、売買目的有価証券として保有しています。

これらは、それぞれ発行体の信用リスク及びマーケット(金利・株価・為替等)の変動に伴う市場リスクに晒されています。

主な金融負債である預金については、予期せぬ資金流出が発生するなどの流動性リスクが存在します。また、そのほかの調達資金については、一定の環境の下で当社グループが市場を利用できない場合等において必要な資金が確保できない、あるいは、通常よりも高い金利での資金調達を余儀なくされるといった流動性リスクに晒されています。また、これらの金融負債は、金融資産と同様、金利変動リスクに晒されています。

デリバティブ取引は、顧客ニーズへの対応や、資産・負債のリスクコントロール手段を主な目的として利用しています。また、トレーディング(短期的な売買差益獲得)の一環として、債券や株式の先物取引等を利用しています。これらのデリバティブ取引は、取引相手先の契約不履行などに係る信用リスク(カウンターパーティーリスク)及びマーケット(金利・株価・為替等)の変動に伴う市場リスクに晒されています。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当社グループは、フロント部門から独立したリスク管理部を設置し、リスク管理についての基本方針を定めています。具体的には、リスク管理に関する体制及びリスク管理基本規定等の諸規定を取締役会で定め、リスクカテゴリー毎の責任部署を明確するとともに、それらを統括するリスク管理統括部署を設置しています。

さらに、「リスク管理委員会」並びに「ALM委員会」を設置し、当社グループのリスクの状況を把握するとともに、課題及び対応策を審議しています。それらの審議事項を取締役会等に付議・報告することにより、経営レベルでの実効性のあるリスク管理体制を構築しています。

①統一的リスク管理

当社グループは、当社のリスク管理基本規定及び統一的リスク管理に関する諸規定に従い、統一的リスク管理を行っています。

具体的には、自己資本比率の算定に含まれない与信集中リスクや銀行勘定の金利リスク等も含めて、信用リスクや市場リスク等のリスクカテゴリー毎の方法で評価したリスクを統一的に捉え、経営体力(自己資本)と対比することによって、統一的な管理を行っています。

②信用リスクの管理

当社グループは、当社の信用リスク管理規定及び信用リスク管理に関する諸規定に従い、与信ポートフォリオの分析・管理を行っています。また、個別案件の与信管理については、審査、内部格付、資産自己査定等の体制を整備し運営しています。

これらの与信管理は、傘下銀行の各営業店、審査部署、リスク管理部により行われ、有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティリスクについても、リスク管理部が、信用情報や時価の把握をモニタリングしています。また、当社においても定期的に取締役会等へ報告を行っております。

さらに、与信管理の状況については、監査部署が監査をしています。

③市場リスクの管理

(i) 市場リスク管理

当社グループは、当社の市場リスク管理規定及び市場リスク管理に関する諸規定に従い、マーケット（金利・株価・為替等）の変動に伴う市場リスクの管理を行っています。具体的には、リスク管理部がバリュー・アット・リスク（VaR）を用いて市場リスク量を把握するとともに、市場リスク量を一定の範囲内にコントロールすることを目的として、継続的なモニタリングを実施し、リスク限度額の遵守状況を監視しています。有価証券については、上記のリスク限度額管理に加えて、損失に上限を設定し、管理しています。なお、これらの情報はリスク管理部から、リスク管理委員会及び取締役会へ定期的に報告されています。

また、ALM委員会において、資産・負債構造ならびに金利リスクの把握・確認を行うとともに、今後の対応等の協議を行っています。具体的には、ALM担当部署において金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、ギャップ分析や金利感応度分析等を行うことにより、安定的かつ継続的な収益の確保に努めています。

なお、傘下銀行において外為取引や外債投資等の為替リスクを伴う取引を行っていますが、為替持高をできるだけスクウェアに近い状態にすることで、為替リスクの低減に努めています。

(ii) デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取引の執行、リスク管理、事務管理に関する部門をそれぞれ分離し内部牽制を図るとともに、市場リスク管理に関する諸規定に従い取引を行っています。

(iii) 市場リスクに係る定量的情報

市場リスクは他のリスクに比べて日々の変動が大きいため、当社グループでは、預金、貸出金や有価証券などの金融商品の市場リスク量を、VaRを用いて日次で把握、管理しています。

このVaR算定にあたっては、分散共分散法（保有期間120営業日、信頼区間99.0%、観測期間240営業日）を採用しています。

平成26年3月31日（当期の連結決算日）現在で当社グループの金融商品の市場リスク量（損失額の推計値）は、金利が275億円、株式が72億円となっています。また、相関を考慮した市場リスク量全体では359億円となっています。

なお、当社グループでは、金融商品のうち市場変動の影響が大きい有価証券関連のVaRについて、市場リスク計測モデルの正確性を検証するために、モデルが算出した保有期間1日のVaRと実際の損益を比較するバックテストを実行しています。

平成25年度分に関して実施したバックテストの結果、実際の損失がVaRを超えた回数は3回であり、使用する計測モデルは十分な精度により市場リスクを捕捉しているものと考えています。

ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

④資金調達に係る流動性リスクの管理

当社グループは、当社の資金流動性リスク管理規定及び資金流動性リスク管理に関する諸規定に従い、資金調達に係る流動性リスクの管理を行っています。

具体的には、傘下銀行のALM担当部署や資金為替担当部署が、グループ全体の運用・調達状況を適時適切に把握するとともに、保有資産の流動性の確保や調達手段の多様化を図るなど、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、安定した資金繰りの確保に努めています。

また、リスク管理部は、短期間に資金化可能な流動性準備資産額を定期的に確認することで、流動性リスク顕現化時の対応力を把握するとともに、資金繰り管理の適切性をモニタリングし、リスク管理委員会や取締役会等へ報告しています。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれています。

当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式会社等は、次表には含めておりません（注2）参照。

	(単位：百万円)		
	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	215,658	215,658	—
(2) コールローン及び買入手形	775	775	—
(3) 買入金銭債権（*1）	1,121	1,121	—
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	122	122	—
(5) 金銭の信託	27,000	27,000	—
(6) 有価証券			
満期保有目的の債券	88,403	88,946	542
その他有価証券	1,280,018	1,280,018	—
(7) 貸出金	3,602,329		
貸倒引当金（*1）	△37,082		
	3,565,246	3,583,502	18,256
(8) 外国為替（*1）	5,528	5,529	1
資産計	5,183,875	5,202,675	18,800
(1) 預金	4,580,769	4,581,200	431
(2) 債券貸借取引受入担保金	315,691	315,691	—
(3) 借入金	118,517	119,132	614
(4) 外国為替	366	366	—
(5) 社債	70,000	71,529	1,529
負債計	5,085,345	5,087,921	2,575
デリバティブ取引（*2）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(336)	(336)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	358	358	—
デリバティブ取引計	22	22	—

（*1）貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権及び外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

（*2）その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

- 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、約定期間が短期間（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- コールローン及び買入手形

これらは、残存期間が短期間（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- 買入金銭債権

ファクタリング業務に係る債権は、貸出金と同様の方法により算定しております。
- 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。
- 金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券については、株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。
- 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。
- 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

- (8) 外国為替
 外国為替は、他の銀行に対する外貨預け金（外国他店預け）、輸出手形・旅行小切手等（買入外国為替）及び輸入手形による手形貸付（取立外国為替）であります。これらは、満期のない預け金、又は約定期間が短期間（1年以内）であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

負債

- (1) 預金
 要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (2) 債券貸借取引受入担保金
 約定期間が短期間（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (3) 借入金
 借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当社並びに連結子会社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元金合計額を同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (4) 外国為替
 外国為替は、売渡外国為替及び未払外国為替であり、これらは、約定期間が短期間（1年以内）であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (5) 社債
 連結子会社の発行する社債の時価は、市場価格によっております。
- (注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(6) 有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

①非上場株式（*1）（*2）	5,763
②組出資金（*3）	1,068
③その他	5
合計	6,837

- (*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。
- (*2) 当連結会計年度において、非上場株式について96百万円減損処理を行っております。
- (*3) 組出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	163,565	—	—	—	—	—
コールローン及び買入手形	775	—	—	—	—	—
買入金銭債権（*1）	1,121	—	—	—	—	—
有価証券	187,889	389,430	382,957	73,402	52,910	105,555
満期保有目的の債券	14,100	33,500	40,800	—	—	—
うち国債	—	—	25,000	—	—	—
社債	14,100	28,500	2,800	—	—	—
その他	—	5,000	13,000	—	—	—
その他金融資産	173,789	355,930	342,157	73,402	52,910	105,555
うち国債	105,000	134,100	15,000	35,500	2,500	—
地方債	25,049	23,453	1,350	950	2,580	—
社債	42,914	114,038	50,932	2,463	304	57,405
その他	826	84,338	274,875	34,488	47,526	48,149
貸出金（*1, 2）	684,986	613,908	436,033	288,451	324,227	1,184,523
外国為替	5,529	—	—	—	—	—
合計	1,043,868	1,003,339	818,991	361,853	377,138	1,290,079

- (*1) 貸出金及び買入金銭債権のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない70,204百万円は含めておりません。
- (*2) 貸出金のうち当座貸越については、「1年以内」に含めて開示しております。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金（*1）	4,239,778	272,112	39,004	883	623	—
債券貸借取引受入担保金	315,691	—	—	—	—	—
借入金（*2）	85,075	15,007	1,247	154	17,032	—
社債	—	—	—	15,000	55,000	—
合計	4,640,544	287,120	40,251	16,038	72,656	—

- (*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。
- (*2) (重要な後発事象)の注記に記載のとおり、当社の子会社である池田泉州銀行は、平成26年6月9日に、借入金8,000百万円を期限前返済しているため、「1年以内」に含めて開示しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型の確定給付制度を採用しております。

連結子会社の確定給付企業年金制度（積立型制度であります。）では、勤務期間等に基づいて一時金又は年金を支給しております。確定給付企業年金制度には、退職給付信託が設定されております。

連結子会社の退職一時金制度（非積立型制度であります。退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっております。）では、退職給付として、勤務期間等に基づいて一時金を支給しております。

一部の連結子会社においても、確定給付型の制度として、退職一時金制度（すべて非積立型制度であります。）を設け、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

区分	金額（百万円）
退職給付債務の期首残高	32,008
勤務費用	1,029
利息費用	401
数理計算上の差異の発生額	△356
退職給付の支払額	△1,791
過去勤務費用の発生額	—
その他	12
退職給付債務の期末残高	31,304

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

区分	金額（百万円）
年金資産の期首残高	29,370
期待運用収益	624
数理計算上の差異の発生額	3,752
事業主からの拠出額	1,756
退職給付の支払額	△1,202
退職給付信託設定	3,378
その他	—
年金資産の期末残高	37,680

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

区分	金額（百万円）
積立型制度の退職給付債務	31,184
年金資産	△37,680
非積立型制度の退職給付債務	△6,496
退職給付の支払額	120
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△6,376

区分	金額（百万円）
退職給付に係る負債	120
退職給付に係る資産	△6,496
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△6,376

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

区分	金額（百万円）
勤務費用	1,029
利息費用	401
期待運用収益	△624
数理計算上の差異の費用処理額	892
過去勤務費用の費用処理額	△336
会計基準変更時差異の費用処理額	659
確定給付制度に係る退職給付費用	2,022

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

区分	金額（百万円）
未認識過去勤務費用	△2,450
未認識数理計算上の差異	205
会計基準変更時差異の未処理額	659
合計	△1,585

(6) 年金資産に関する事項

①年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	10%
株式	67%
現金及び預金等短期運用資金	6%
生保一般勘定	4%
その他	13%
合計	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が31%含まれております。

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(7) 数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎

- ①割引率 1.0%～1.3%
- ②長期期待運用収益率 2.5%

(ストック・オプション等関係)

1. ストック・オプションにかかる費用計上額及び科目名
営業経費 26百万円
2. ストック・オプションの内容、規模及びその変動状況
(1) ストック・オプションの内容

決議年月日	平成23年2月24日	平成23年7月28日
付与対象者の区分及び人数(名)	子会社取締役 22 子会社執行役員 19	子会社取締役 16 子会社執行役員 18
株式の種類別のストック・オプションの数(株)	普通株式 84,780	普通株式 72,760
付与日	平成23年3月15日	平成23年8月31日
権利確定条件	退任後10日以内の権利行使	退任後10日以内の権利行使
対象勤務期間	平成23年3月15日から退任日	平成23年8月31日から退任日
権利行使期間	平成23年3月16日から平成53年7月31日まで	平成23年9月1日から平成53年7月31日まで

決議年月日	平成24年8月31日	平成25年7月31日
付与対象者の区分及び人数(名)	子会社取締役 10 子会社執行役員 16	子会社取締役 10 子会社執行役員 16
株式の種類別のストック・オプションの数(株)	普通株式 69,500	普通株式 53,800
付与日	平成24年10月1日	平成25年9月2日
権利確定条件	退任後10日以内の権利行使	退任後10日以内の権利行使
対象勤務期間	平成24年10月1日から退任日	平成25年9月2日から退任日
権利行使期間	平成24年10月2日から平成54年7月31日まで	平成25年9月3日から平成55年7月31日まで

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、平成24年8月1日付株式併合(5株につき1株の割合)による併合後の株式数に換算して記載しております。

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(平成26年3月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

①ストック・オプションの数

決議年月日	平成23年2月24日	平成23年7月28日	平成24年8月31日	平成25年7月31日
権利確定前(株)				
前連結会計年度末	41,140	42,800	69,500	—
付与	—	—	—	53,800
失効	—	—	—	—
権利確定	12,800	12,400	20,000	—
未確定残	28,340	30,400	49,500	53,800
権利確定後(株)				
前連結会計年度末	—	—	—	—
権利確定	12,800	12,400	20,000	—
権利行使	12,800	12,400	20,000	—
失効	—	—	—	—
未行使残	—	—	—	—

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、平成24年8月1日付株式併合(5株につき1株の割合)による併合後の株式数に換算して記載しております。

②単価情報

決議年月日	平成23年2月24日	平成23年7月28日	平成24年8月31日	平成25年7月31日
権利行使価格(円)	1	1	1	1
行使時平均株価(円)	517	517	517	—
付与日における公正な評価単価(円)	490	535	449	430

(注) 平成24年8月1日付株式併合(5株につき1株の割合)による影響を勘案してあります。

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与されたストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下のとおりであります。

(1) 使用した評価技法 ブラック・ショールズ式

(2) 主な基礎数値及び見積り方法

決議年月日	平成25年7月31日
株価変動性	(注) 1 34.79%
予想残存期間	(注) 2 3.614年
予想配当	(注) 3 3.112%
無リスク利率	(注) 4 0.178%

(注) 1. 予想残存期間に対応する過去期間(平成22年1月21日から平成25年9月2日)の株価実績

2. 在任者ごとに「退任者の在任期間平均」と「在任者の付与時の在任期間」の差を取り、0.8年未満の場合は次回株主総会までの期間を考慮し、0.8年として平均する方法により算定

3. 直近年間配当額15円/算定基準日における株価482円

4. 予想残存期間に近似する国債利回り

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	31,867百万円
賞与引当金	599百万円
退職給付に係る負債	1,791百万円
有価証券評価損	6,747百万円
繰越欠損金	16,562百万円
減価償却費	777百万円
その他有価証券評価差額金	3,680百万円
その他	3,350百万円
繰延税金資産小計	65,377百万円
評価性引当額	△35,831百万円
繰延税金資産合計	29,545百万円
繰延税金負債	
未収配当金益金不算入	△324百万円
その他有価証券評価差額金	△2,991百万円
その他	△14百万円
繰延税金負債合計	△3,330百万円
繰延税金資産の純額	26,215百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要項目別の内訳

法定実効税率	37.9%
(調整)	
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.0%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3%
住民税均等割等	0.5%
評価性引当額の減少	△26.6%
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	1.7%
その他	△1.0%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	12.8%

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成26年法律第10号)が平成26年3月31日に公布され、平成26年4月1日以後に開始する事業年度から復興特別法人税が廃止されることとなりました。これに伴い、平成26年4月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異等にかかる繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の37.96%から35.59%となりました。この税率変更により、繰延税金資産は537百万円減少し、その他有価証券評価差額金は5百万円減少し、法人税等調整額は531百万円増加しております。

(企業結合等関係)

1. 被取得企業の名称及びその事業の内容、企業結合を行った主な理由、企業結合日、企業結合の法的形式、結合後企業の名称、取得した議決権比率及び取得企業を決定するに至った主な根拠

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 池田泉州T T証券株式会社

事業の内容 金融商品取引業

(2) 企業結合を行った主な理由

当社グループの持つ強固な営業基盤と、東海東京フィナンシャル・グループの証券業を中心とする高度なノウハウ・機能を融合させた、地域に根ざした新しい形の証券会社、池田泉州T T証券株式会社を子会社として当社グループに加え、資産運用分野において多様化・高度化する地域のお客さまのニーズにより的確にお応えするとともに、グループの総合的な金融機能・提案力の強化を図ります。

(3) 企業結合日

平成25年9月2日

(4) 企業結合の法的形式並びに結合後企業の名称

企業結合の法的形式 株式取得

結合後企業の名称 変更ありません。

(5) 取得した議決権比率

60.0%

(6) 取得企業を決定するに至った主な根拠

池田泉州T T証券株式会社は、当社及び株式会社池田泉州銀行の営業地域における豊富なネットワークと、独立系フルライン型の証券会社として東海東京証券株式会社が培ってきた金融商品取引業に関するノウハウを最大限活かして、地域及び地域のお客さまのお役に立つ証券会社を目指すことができると考えたものです。

2. 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成25年10月1日から平成26年3月31日まで

3. 被取得企業の取得原価及びその内訳

取得原価 2,400百万円

株式取得費用(現金) 2,400百万円

4. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内容

現金預け金	222百万円
その他資産	264百万円
有形固定資産	11百万円
無形固定資産	2百万円
資産の部合計	501百万円
その他負債	393百万円
負債の部合計	393百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

- (1) 発生したのれん
951百万円
- (2) 発生原因
被取得企業に係る当社の持分額と取得価額との差額により、発生したものであります。
- (3) 償却方法及び償却期間
5年間の均等償却。

6. 企業結合が当連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額

影響は軽微であります。

(資産除去債務関係)

資産除去債務の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(関連当事者情報)

該当ありません。

(1株当たり情報)

1株当たり純資産額	610.84円
1株当たり当期純利益金額	64.77円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	64.73円

(注) 1. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

純資産の部の合計額	196.397百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	51.512百万円
(うち第二種優先株式払込金額)	25.000百万円
(うち第二種優先株式配当額)	1.275百万円
(うち第二種優先株式払込金額)	15.000百万円
(うち新株予約権)	68百万円
(うち少数株主持分)	10.168百万円
普通株式に係る期末の純資産額	144.884百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた	
期末の普通株式の数	237,189千株

2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

1株当たり当期純利益金額	
当期純利益	16.604百万円
普通株主に帰属しない金額	1.275百万円
うち定時株主総会決議による第二種優先株式配当額	1.275百万円
普通株式に係る当期純利益	15.329百万円
普通株式の期中平均株式数	236.671千株
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	
当期純利益調整額	一百万円
普通株式増加数	138千株
うち新株予約権	138千株

希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要

(会計方針の変更)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下、「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日。以下、「退職給付適用指針」という。)を、当連結会計年度末より適用し(ただし、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めを除く)、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従っております。

この結果、当連結会計年度の1株当たり純資産額が、4円31銭増加しております。

(重要な後発事象)

(多額の借入金の期限前返済)

当社の子会社である株式会社池田泉州銀行は、平成26年5月30日開催の取締役会において、平成21年6月8日に借入した劣後特約借入金について、期限前返済することを決議し、平成26年6月9日に期限前返済いたしました。

1. 期限前返済を行う理由
本借入金には、期限前返済が可能な条項が付されており、支払利息軽減を図るため、期限前返済することいたしました。
2. 期限前返済金額
8,000百万円
3. 期限前返済方法
未返済額の全額期限前返済によります。
4. 返済資金の調達方法
全額自己資金により返済いたします。
5. 返済による支払利息の減少見込額(概算値)
5年間の累計額 1,592百万円

セグメント情報等

1.セグメント情報

当社グループは、報告セグメントが銀行業のみであり、当社グループの業績における「その他」の重要性が乏しいため、記載を省略しております。なお、「その他」にはリース業務等が含まれております。

2.関連情報

前連結会計年度（自平成24年4月1日 至平成25年3月31日）

(1) サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	54,701	27,321	29,535	111,558

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(2) 地域ごとの情報

① 経常収益

当社グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

② 有形固定資産

当社グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

(3) 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自平成25年4月1日 至平成26年3月31日）

(1) サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	51,103	22,831	30,920	104,855

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(2) 地域ごとの情報

① 経常収益

当社グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

② 有形固定資産

当社グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

(3) 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

3.報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報

当社グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

4.報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報

当社グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

5.報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報

当社グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

自己資本の充実の状況等

「銀行法施行規則第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項」(平成26年金融庁告示第7号)に基づき、パーゼルⅢ第3の柱の内容を以下に開示しております。

自己資本の構成に関する開示事項

自己資本比率は、告示に定められた算式に基づき、連結ベースについて算出しております。

なお、当社は国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率 (平成26年3月期、パーゼルⅢ)

(単位:百万円)

項目	平成26年3月31日	
		経過措置による 不算入額
コア資本に係る基礎項目 (1)		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	140,194	
うち、資本金及び資本剰余金の額	99,063	
うち、利益剰余金の額	46,949	
うち、自己株式の額 (△)	728	
うち、社外流出予定額 (△)	5,090	
うち、上記以外に該当するものの額	—	
コア資本に算入されるその他の包括利益累計額	—	
うち、為替換算調整勘定	—	
うち、退職給付に係るものの額	—	
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	68	
コア資本に係る調整後少数株主持分の額	12	
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	16,164	
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	16,164	
うち、適格引当金コア資本算入額	—	
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	40,000	
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	72,471	
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	
少数株主持分のうち、経過措置によりコア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	2,156	
コア資本に係る基礎項目の額 (イ)	271,067	
コア資本に係る調整項目 (2)		
無形固定資産 (モーゲージ・サービシング・ライセンスに係るものを除く。)の額の合計額	856	4,630
うち、のれんに係るもの (のれん相当差額を含む。)の額	856	—
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライセンスに係るもの以外の額	—	4,630
繰延税金資産 (一時差異に係るものを除く。)の額	—	7,424
適格引当金不足額	—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	429	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—	—
退職給付に係る資産の額	—	4,184
自己保有普通株式等 (純資産の部に計上されるものを除く。)の額	—	—
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—	—
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—	10,992
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライセンスに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産 (一時差異に係るものに限る。)に関連するものの額	—	10,992
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライセンスに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産 (一時差異に係るものに限る。)に関連するものの額	—	—
コア資本に係る調整項目の額 (ロ)	1,285	
自己資本		
自己資本の額 ((イ) - (ロ)) (ハ)	269,782	
リスク・アセット等 (3)		
信用リスク・アセットの額の合計額	2,454,601	
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	22,116	
うち、無形固定資産 (のれん及びモーゲージ・サービシング・ライセンスに係るものを除く。)	4,630	
うち、繰延税金資産	18,416	
うち、退職給付に係る資産	4,184	
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	△ 5,115	
うち、上記以外に該当するものの額	—	
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—	
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	116,672	
信用リスク・アセット調整額	—	
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—	
リスク・アセット等の額の合計額 (ニ)	2,571,273	
連結自己資本比率		
連結自己資本比率 ((ハ) / (ニ))	10.49%	

連結自己資本比率（平成25年3月期、バーゼルⅡ）

（単位：百万円）

項 目		平成25年3月31日
基本的項目 (Tier1)	資本金	72,311
	うち非累積的永久優先株	—
	新株式申込証拠金	—
	資本剰余金	62,235
	利益剰余金	35,431
	自己株式（△）	1,350
	自己株式申込証拠金	—
	社外流出予定額（△）	5,251
	その他有価証券の評価差損（△）	—
	為替換算調整勘定	—
	新株予約権	63
	連結子法人等の少数株主持分	8,820
	うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券	—
	営業権相当額（△）	—
	のれん相当額（△）	—
	企業結合等により計上される無形固定資産相当額（△）	—
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額（△）	489
	繰延税金資産の控除金額（△）	—
	計	(A) 171,771
補完的項目 (Tier2)	うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券 及び基本的項目（A）に対する割合	—
	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の 差額の45%相当額	—
	一般貸倒引当金	28,787
	負債性資本調達手段等	75,000
	うち永久劣後債務	—
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株	75,000
	補完的項目不算入額（△）	13,091
計	(B) 90,695	
控除項目	(C) 1,333	
自己資本額	(A) + (B) - (C) (D) 261,133	
リスク・アセット等	資産（オン・バランス）項目	2,349,301
	オフ・バランス取引等項目	39,525
	信用リスク・アセットの額	(E) 2,388,826
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 = (G) / 8% （参考）オペレーショナル・リスク相当額	(F) 122,482 (G) 9,798
	計 (E) + (F)	(H) 2,511,308
連結総所要自己資本額 = (H) × 4%	100,452	
連結自己資本比率（国内基準） = (D) / (H) × 100（%）	10.39%	
（参考）Tier1比率 = (A) / (H) × 100（%）	6.83%	

定性的な開示事項

【連結の範囲に関する事項】

- (1) 銀行法第52条の25の規定に基づき、銀行持株会社が銀行持株会社及びその子会社の保有する資産等に照らしそれらの自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第20号。以下「持株自己資本比率告示」という。）第15条の規定により連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団（以下「持株会社グループ」という。）に属する会社と連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）第5条に基づき連結の範囲（以下「会計連結範囲」という。）に含まれる会社との相違点及び当該相違点の生じた原因

連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団に属する会社と会計連結範囲に含まれる会社に相違点はありません。

- (2) 持株会社グループのうち、連結子会社の数並びに主要な連結子会社の名称及び主要な業務の内容（平成26年3月31日）

持株会社グループに属する連結子会社は、30社であります。

主要な連結子会社

名 称	主要な業務の内容	名 称	主要な業務の内容
1 (株)池田泉州銀行	銀行業務	10 (株)ディーアイ	クレジットカード業務
2 池田泉州TT証券(株)	証券業務	11 (株)池田泉州VC	クレジットカード業務
3 池田泉州ターンアラウンド・パートナーズ(株)	銀行業務（事業再生業務）	12 池田泉州キャピタル(株)	ベンチャーキャピタル業務
4 池田泉州コーポレート・パートナーズ(株)	銀行業務（事業再生業務）	13 池田泉州ビジネスサービス(株)	現金清算・印刷・事務代行業務
5 池田泉州リース(株)	リース業務	14 池田泉州オフィスサービス(株)	人材派遣業務
6 泉銀総合リース(株)	リース業務	15 池田泉州モーゲージサービス(株)	担保不動産評価・調査業務
7 池田泉州信用保証(株)	信用保証業務	16 池田泉州システム(株)	コンピューターソフト開発・販売業務
8 近畿信用保証(株)	信用保証業務	17 池田泉州投資顧問(株)	投資助言業務・投資一任業務
9 (株)池田泉州JCB	クレジットカード業務	18 池田泉州ファイナンス(株)	貸金業務

- (3) 持株自己資本比率告示第21条が適用される金融業務を営む関連法人等の数並びに当該金融業務を営む関連法人等の名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産の額並びに主要な業務の内容

該当ありません。

- (4) 持株会社グループに属する会社であって会計連結範囲に含まれないもの及び持株会社グループに属しない会社であって会計連結範囲に含まれるものの名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産額並びに主要な業務の内容

該当ありません。

- (5) 持株会社グループ内の資金及び自己資本の移動に係る制限等の概要

該当ありません。

【自己資本調達手段の概要】

(1) 自己資本調達手段（その額の全部又は一部が、持株自己資本比率告示第14条の算式におけるコア資本に係る基礎項目の額に含まれる資本調達手段をいう。）の概要（平成26年3月31日）

1	発行主体	株式会社池田泉州ホールディングス	株式会社池田泉州ホールディングス	株式会社池田泉州ホールディングス	株式会社池田泉州銀行	株式会社池田泉州銀行	池田泉州ターンアラウンド・パートナーズ株式会社 池田泉州コーポレート・パートナーズ株式会社 池田泉州TT証券株式会社 他
2	資本調達手段の種類	普通株式	新株予約権	優先株式 ①第二種 ②第三種	劣後特約付社債	劣後特約付借入金	少数株主持分
3	コア資本に係る基礎項目の額に算入された額	98,335百万円	68百万円	①25,000百万円 ②15,000百万円	64,471百万円 参考) 各社債の額 ①15,000百万円 ②10,000百万円 ③ 5,000百万円 ④20,000百万円 ⑤10,000百万円 ⑥10,000百万円	参考) 各借入金額 ① 8,000百万円 ②10,000百万円 ③ 5,500百万円 ④ 1,500百万円	10,168百万円
4	配当率又は利率（公表されている場合）	—	—	①配当率5.10% ②配当率3.50%	①年 1.67%（平成27年12月17日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 2.45%（平成27年12月17日翌日以降） ②年 2.01%（平成28年9月21日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 3.00%（平成28年9月21日翌日以降） ③年 2.06%（平成28年12月16日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 3.02%（平成28年12月16日翌日以降） ④年 2.23%（平成29年3月23日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 3.21%（平成29年3月23日翌日以降） ⑤年 1.40%（平成30年9月25日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 2.42%（平成30年9月25日翌日以降） ⑥年 1.35%（平成30年12月27日まで）、6ヶ月ユーロ円LIBOR + 2.42%（平成30年12月27日翌日以降）	—	—
5	償還期限の有無と日付	なし	なし	なし	①あり。 平成32年12月17日 ②あり。 平成33年9月21日 ③あり。 平成33年12月16日 ④あり。 平成34年3月23日 ⑤あり。 平成35年9月25日 ⑥あり。 平成35年12月27日	①あり。 平成31年6月10日 ②あり。 平成33年9月29日 ③あり。 平成34年9月30日 ④あり。 平成34年10月5日	なし
6	一定の事由が生じた場合に償還等を可能とする特約の有無と、ある場合はその概要	なし	なし	なし	①～⑥いずれもあり。 金融庁の事前承認を得たうえで、以下の日付以降に到来する支払期日の前25日以上60日以内の事前公告もしくは事前通知により期限前償還が可能。 ①平成27年12月17日 ②平成28年9月21日 ③平成28年12月16日 ④平成29年3月23日 ⑤平成30年9月25日 ⑥平成30年12月27日	①～④いずれもあり。 金融庁の事前承認を得たうえで、以下の日付までの書面通知により期限前弁済が可能。 ①平成26年6月9日以降に到来する利払日の14日以上前 ②平成28年9月29日以降に到来する利払日の30日前 ③平成29年9月29日以降に到来する利払日の30日前 ④平成29年10月5日以降に到来する利払日の14日以上前	なし
7	他の種類への資本調達手段への転換に係る特約の有無と、ある場合はその概要	なし	なし	なし	なし	なし	なし

8	元本の削減にかかる特約の有無と、ある場合はその概要	なし	なし	なし	なし	なし	なし
9	配当等停止条項がある場合は、その旨並びに停止した未払いの配当又は利息にかかる累積の有無	なし	なし	なし	なし	なし	なし
10	ステップ・アップ金利等に係る特約その他の償還等を行う蓋然性を高める特約の有無と、ある場合はその概要	なし	なし	なし	①～⑥いずれもあり。以下の日付以降、ステップ・アップ金利を適用。 ①平成27年12月17日曜日 ②平成28年9月21日曜日 ③平成28年12月16日曜日 ④平成29年3月23日曜日 ⑤平成30年9月25日曜日 ⑥平成30年12月27日曜日	①～④いずれもあり。以下の日付以降、ステップ・アップ金利を適用。 ①平成26年6月9日曜日 ②平成28年9月29日曜日 ③平成29年9月29日曜日 ④平成29年10月5日曜日	なし

【自己資本の充実度に関する事項】

(1) 持株会社グループの自己資本の充実度に関する評価方法の概要

<自己資本管理の方針>

当社は、財務健全性の観点から、十分な自己資本を確保し、適切な管理・運営を行うことを自己資本管理の基本方針とし、「自己資本比率の算定」、「自己資本充実度の評価」、及び「自己資本充実に関する施策の実施」により自己資本管理を行っております。

<自己資本充実度の評価>

当社では、法令などに規定される自己資本比率による管理に加え、直面する各種リスクを把握・管理し、当社の経営体力（自己資本）と比較・対照することによって、自己資本充実度の評価を行っております。

具体的には、銀行業を営む連結子会社（以下「子銀行」という）において「信用リスク」「市場リスク」「オペレーショナル・リスク」等の各リスク種類別に自己資本（コア資本）の範囲内で資本配賦を行い、計量化された各種リスク量が配賦資本額の範囲内にコントロールされていることを定期的にモニタリングすることにより、リスクの状況を把握し、一定の自己資本を確保する態勢としております。

このほか、一定の金利ショックの発生や、与信集中リスクに係るストレステスト、さらには各種リスクに対して重大な悪化を想定したシナリオによるストレステスト等の実施により、自己資本毀損の影響額等を試算し、自己資本充実度の評価を補完しております。なお、子銀行以外の連結子会社については、主として連結自己資本比率の管理を通じて自己資本の充実度の評価を行っております。

【信用リスクに関する事項】

(1) リスク管理の方針及び手続の概要

<リスク管理の方針、手続の概要>

信用リスクとは、信用供与先の財務状況の悪化、契約不履行等により、資産の価値が減少ないし、消失し、損失を被るリスクをいいます。

当社及び子銀行では、経営方針を踏まえつつ与信行為の具体的な考え方を明示した「クレジットポリシー」を制定し、健全性の確保を第一に取り組んでおります。具体的には、管理方法を明示した「信用リスク管理規定」に基づき、信用リスク管理部において、与信集中リスクの状況に加え、業種別・債務者区分別・信用格付区分別等さまざまな角度から与信ポートフォリオの分析・管理を行い、最適なポートフォリオの構築を図るべく、きめ細かな対応を行っております。

<貸倒引当金の計上基準>

信用リスクを定量的に計測するための算定基準を整備し、信用リスクの計量化に取り組んでおります。与信ポートフォリオの分析・管理及び計測した信用リスク量については、取締役会等へ報告することにより、信用リスクの適切な管理運営に努めております。

個別案件の審査・与信管理については、審査部署・問題債権管理部署の、営業推進部署からの独立性を確保するとともに、取締役会等で大口与信先の個別案件や与信方針の検討を行うなど、審査体制を整備し資産の健全性の維持・向上に努めております。

また、貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

子銀行以外の連結子会社においても、当社の信用リスク管理方針に基づき資産の自己査定を実施し、必要額を引き当てております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しております。

(2) リスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関

当社及び連結子会社では自己資本比率規制上の信用リスク・アセット額の算出にあたっては、告示に定める「標準的手法」を採用しております。

リスク・ウェイトの判定においては、内部管理との整合を考慮し、また、特定の格付機関に偏らず、格付の客観性を高めるためにも複数の格付機関を利用することが適切との判断に基づき、次の格付機関を採用しております。

(株)格付投資情報センター (R&I)

(株)日本格付研究所 (JCR)

ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク (Moody's)

スタンダード・アンド・プアーズ・レーティングス・サービスズ (S&P)

【信用リスク削減手法に関する事項】

信用リスク削減手法とは、当社及び連結子会社が抱える信用リスクを削減するための措置をいい、担保、保証、貸出金と自行預金の相殺が該当します。

与信判断に際しては、取引先の経営状態や案件の妥当性等を十分に検討しており、担保や保証については、過度に依存することなく、取引先や返済原資の安全性を補完するものとして取得しております。

(1) 主要な担保や保証の種類

主要な担保の種類には、預金、株式、公社債、商業手形、不動産等があり、保証については、信用保証協会、我が国の地方公共団体等による保証が主体となっております。

なお、自己資本比率の算出にあたっては、告示上の要件をみたす適格金融資産担保、適格保証、及び貸出金と自行預金の相殺を信用リスク削減手法として適用しております。

具体的には、適格金融資産担保は、現金、自行定期預金、日本国債、政府保証債、地方債、我が国の金融機関の発行する債券（劣後債を除く）、上場株式を対象としております。適格保証は、我が国の地方公共団体、金融機関の保証が主なもので、その信用度については、政府保証と同様の評価が、適格格付機関による格付が付与されたものとなっております。

(2) 担保に関する評価、管理の方針及び手続の概要

担保評価は、あらかじめ定められた方法により実施しており、評価の見直し等は、新規の与信判断と同様の姿勢で定期的に行っております。また、担保の管理については、その効力、対抗要件を完備し、担保を害する行為の発生を防止、排除に努めております。

(3) 貸出金と自行預金の相殺を用いるにあたっての方針及び手続の概要等

貸出金と自行預金の相殺にあたっては、担保（総合口座を含む）登録のない相殺確実な自行定期預金を対象とし、自己資本比率の算定にあたっては、告示上の要件をみたすものについて信用リスク削減手法を勘案しております。

(4) 派生商品取引及びレボ形式の取引について法的に有効な相対ネットリング契約を用いるにあたっての方針及び手続の概要等

当該相対ネットリング契約は、信用リスク削減手法として適用しておりません。

(5) 信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスク及びマーケット・リスクの集中に関する情報

信用リスク削減手法の適用について、同一業種への過度の集中等、特筆すべき事項はありません。また、マーケット・リスクにさらされる金融資産担保についても、特筆すべき事項はありません。

【派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項】

(1) リスク資本及び与信限度枠の割当方法に関する方針

子銀行における金融機関を相手とする派生商品取引にかかる信用リスクについては、適格格付機関の付与する格付等をもとに、その他の銀行間取引市場における与信取引と合算で与信上限枠を設定し、管理を行っております。なお、長期決済期間取引に該当する取引はありません。

※長期決済期間取引：有価証券等の受渡し又は決済を行う取引であって、約定日から受渡日（決済日）までの期間が5営業日又は市場慣行による期間を超えることが約定され、反対取引に先立って取引相手に対して有価証券等の引渡し又は資金の支払いを行う取引

(2) 担保による保全及び引当金に関する方針

対顧客向けの金融派生商品取引については、融資取引と同様に取引先の信用力、取引状況等に応じて保全を図っております。

また、引当金については、自己査定結果に基づき適切に計上しております。

(3) 自社の信用力の悪化により担保を追加的に提供することが必要になる場合の影響度に関する説明

対金融機関との派生商品取引において、ISDA Credit Support Annex (CSA) 契約を締結する担保付取引については、当社及び子銀行の格付低下等の信用力低下によって追加的に取引相手に担保提供する義務が生じる可能性があります。平成26年3月期末時点において担保の追加提供義務は生じておりません。

また、今後において担保の追加提供義務が発生した場合でも、担保として提供可能な資産を十分保有しており影響は軽微なものにとどまると認識しております。

【証券化エクスポージャーに関する事項】

(1) リスク管理の方針及びリスク特性の概要

子銀行は、投資家として運用の多様化を目的に証券化商品に投資を行うとともに、オリジネーター及びサービサーとして証券化取引に関与しております。

子銀行が投資家として保有する証券化エクスポージャーは、貸出金や有価証券等と同様に信用リスク、金利リスク、市場流動性リスクを有しております。

また、子銀行がオリジネーターとして保有する証券化エクスポージャーは、金利上昇リスクの軽減を目的として、保有する固定金利型住宅ローン債権の一部を証券化したものであり、子銀行が保有する信用補完目的の劣後受益権に関連する信用リスク、金利リスク及び市場流動性リスクを有しております。

子銀行はこれらのリスクに対して、適格格付機関による格付情報、裏付資産の状況等のモニタリングを定期的を実施し、リスクの的確な把握と管理に努めております。

(2) 持株自己資本比率告示第227条第4項第3号から第6号まで（持株自己資本比率告示第232条第2項及び第280条の4第1項において準用する場合を含む。）に規定する体制の整備及びその運用状況の概要

子銀行において、証券化取引に係るモニタリングを実施するための手順（以下、「モニタリング手順」という。）を制定し、取得すべき証券化エクスポージャーの包括的なリスク特性に係る情報、その裏付資産に関する包括的なリスク特性及びパフォーマンスに係る情報を定め、継続的、適時に情報を把握する体制を構築しております。

また、制定したモニタリング手順に則り、証券化エクスポージャーに関する情報をオリジネーター等から定期的に収集し、証券化エクスポージャー及びその裏付資産のリスク特性、裏付資産プールのパフォーマンス及び証券化エクスポージャーに重大な影響を及ぼす可能性のある信用補完等の構造的な特性について、モニタリングを実施しております。

さらに、モニタリング実施結果により、証券化エクスポージャーにおける格付利用に関する基準を満たしていることを確認した上で、証券化エクスポージャーの格付利用の可否を判断しております。

(3) 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針

子銀行においては信用リスク削減手法として証券化取引を用いておりません。

(4) 証券化エクスポージャーについて、信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称

子銀行が保有する証券化エクスポージャーの信用リスク・アセット額の算出にあたっては、告示に定める「標準的手法」を使用しております。

(5) 証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称

子銀行が保有する証券化エクスポージャーには、マーケット・リスク相当額のものはありません。

(6) 証券化目的導管体を用いた第三者の資産に係る証券化取引

子銀行においては証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行っておりません。

(7) 持株会社グループが行った証券化取引（証券化目的導管体を用いて行った証券化取引を含む）に係る証券化エクスポージャーの保有

子銀行が行った証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有している子法人等及び関連法人等はありません。

(8) 証券化取引に関する会計方針

子銀行がオリジネーターとして実施した証券化取引の会計上の処理につきましては、金融資産の契約上の権利に対する支配が他に移転したことにより金融資産の消滅を認識する売却処理を採用しております。なお、資産の売却は、証券化取引の委託者である子銀行が、アレンジャーに優先受益権を売却した時点で認識しております。

また、子銀行が投資家として保有する証券化エクスポージャーについても、それぞれの金融資産について金融商品会計基準に基づいた評価・会計処理を行っております。

(9) 証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイト判定に使用する適格格付機関の名称

子銀行は、証券化エクスポージャーのリスク・ウェイトの判定にあたっては、適格格付機関である(株)格付投資情報センター (R&I)、(株)日本格付研究所 (JCR)、ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク (Moody's)、スタンダード・アンド・プアーズ・レーティングズ・サービス (S&P) の4社の格付を使用しております。

(10) 内部評価方式の概要

子銀行においては内部評価方式を用いておりません。

(11) 定量的な情報の重要な変更

定量的な情報に重要な変更はありません。

【オペレーショナル・リスクに関する事項】

(1) リスク管理の方針及び手続の概要

<リスク管理の方針>

当社及び連結子会社は、オペレーショナル・リスクの顕在化が経営及び業務遂行に大きな影響を及ぼし得ることを認識し、オペレーショナル・リスクを適切に管理する態勢の確立及び、実効性の向上に取り組んでおります。

<手続の概要>

当社及び連結子会社は、オペレーショナル・リスクを「内部プロセス、人、システムが不適切であることもしくは機能しないこと、または外生的事象が生じることから生じる損失に係るリスク」と定義したうえで、①事務リスク、②情報資産 (システム) リスク、③有形資産リスク、④人材リスク、⑤法的リスク、⑥評判リスクの6つのカテゴリーに区分して管理しております。

具体的には、子銀行ならびに当社の各リスク所管部がそれぞれの所管するリスクを管理するとともに、オペレーショナル・リスク統括部署が各リスク所管部と連携を図りオペレーショナル・リスク全体を統括・管理することにより、多様なオペレーショナル・リスクを適切に管理する態勢としております。また、オペレーショナル・リスクに関する損失情報やリスク指標等の収集・分析、必要な手続・手法等の制定・整備等、オペレーショナル・リスクの状況についてリスク管理委員会、取締役会等へ報告・審議を行うことにより、適切な措置がとられる態勢としております。

(2) オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

当社及び子銀行は、告示に定める「粗利益配分手法」によりオペレーショナル・リスク相当額を算出しております。

【銀行勘定における出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項】

(1) リスク管理の方針及び手続の概要

<リスク管理の方針>

子銀行における株式等の保有は、主に中長期的なスタンスで取引先との良好な関係を構築することを目的とし、半期毎に取組方針を取締役会で決定し、厳格な運用を行っております。

また、リスク管理においても、半期毎に政策投資株式に対する「リスク資本配賦額」や、総合損益ベースでの「損失の限度額」を取締役会等の決裁により設定し、その遵守状況を定期的にモニタリングすることにより、株式にかかる価格変動リスクを一定の範囲内に抑える管理運営を行っております。

<手続の概要>

具体的には、フロント部門より独立したリスク管理部門でバリュー・アット・リスク (VaR) によるリスク量の計測や総合損益等のモニタリングを日次で実施し、月次でリスク管理委員会や取締役会へ設定額の遵守状況を報告する態勢としております。株式等の評価は、時価のあるものについては決算日前1ヵ月の市場価格の平均に基づく時価法 (売却原価は移動平均法により算定) により、また、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

また、未上場株式を含め四半期毎に自己査定を実施し、評価損が発生しているものについて、回復可能性を判断のうえ、減損、引当処理を実施しております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。株式等について、会計方針等を変更した場合は、財務諸表等規則第8条の3に基づき変更の理由や影響額について財務諸表の注記に記載しております。

なお、子銀行以外の連結子会社の保有する株式についても上記に準じて取り扱う態勢としていますが、子銀行以外の連結子会社の保有する株式の価格変動リスクが限定的であることから、子銀行の保有する株式等エクスポージャーの市場リスク量を適切に管理することにより、持株会社グループの株式等エクスポージャーの市場リスクを管理しております。

【銀行勘定における金利リスクに関する事項】

(1) リスク管理の方針及び手続の概要

<リスク管理の方針>

銀行勘定における金利リスクとは、全ての金利感応資産・負債・オフバランス取引に係る金利リスクを指し、当社では、市場リスクに内包するものとして、半期毎に市場リスクに対する「リスク資本配賦額」や、有価証券等を取扱う業務執行部門に対する総合損益ベースでの「損失の上限額」を取締役会等の決裁により設定し、その遵守状況を定期的にモニタリングすることにより、市場リスク量や損失額を一定の範囲内に抑える管理運営を行っております。

<手続の概要>

具体的には、フロント部門より独立したリスク管理部門でバリュー・アット・リスク（VaR）によるリスク量の計測や総合損益等のモニタリングを日次で実施し、月次でリスク管理委員会や取締役会へ設定額の遵守状況を報告する態勢としております。

また、銀行勘定の金利リスクについては、アウトライヤー基準値を定期的に計測し、適切な金利リスクの状況把握に努めております。なお、アウトライヤー基準値とは、金融庁による早期警戒制度の「安定性改善措置」におけるモニタリング項目をなすもので、標準的金利ショックによって計算されるリスク量（経済価値の低下）が自己資本（コア資本）に占める割合のことをいいます。

(2) 持株会社グループが内部管理上使用した銀行勘定における金利リスクの算定方法の概要

当社及び子銀行では、市場リスク量の統一的な尺度として、バリュー・アット・リスク（VaR）を採用しているほか、ベース・ポイント・バリュー（BPV）による分析等、多面的なリスクの把握に努めております。またストレステストやバック・テストにより、計量化手法の妥当性や有効性を検証し、リスク管理の実効性を確保するとともに、計量化手法の高度化・精緻化に努めております。なお、要求払預金のうち、引き出されることなく長期間金融機関に滞留する預金をコア預金として、最長5年（平均2.5年以内）の満期に振り分け、リスクを認識しております。

また、アウトライヤー基準値については、保有期間1年、最低5年の観測期間で計測される金利変動の1パーセンタイル値と99パーセンタイル値による金利ショックを「標準的金利ショック」として採用し、金利リスクを認識しております。なお、持株会社グループの金利リスク管理については、子銀行以外の連結子会社の金利リスクが限定的であることから、子銀行の金利リスク量を適切にコントロールすることにより、持株会社グループの金利リスクを管理する態勢としております。

定量的な開示事項

【その他金融機関等（持株自己資本比率告示第18条第6項第1号に規定するその他金融機関等をいう。）であって銀行持株会社の子法人等であるもののうち、規制上の所要自己資本を下回った会社の名称と所要自己資本を下回った額の総額】
該当ありません。

【自己資本充実度に関する事項】

(1) 信用リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

資産（オン・バランス）項目	平成25年3月31日	平成26年3月31日
1. 現金	—	—
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	39	144
4. 国際決済銀行等向け	—	—
5. 我が国の地方公共団体向け	—	—
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	226	146
7. 国際開発銀行向け	—	—
8. 地方公共団体金融機構向け	—	10
9. 我が国の政府関係機関向け	491	742
10. 地方三公社向け	3	5
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	2,384	2,851
12. 法人等向け	31,069	32,161
13. 中小企業等向け及び個人向け	27,464	28,905
14. 抵当権付住宅ローン	14,460	13,674
15. 不動産取得等事業向け	8,133	8,022
16. 三月以上延滞等	1,147	738
17. 取立未済手形	—	—
18. 信用保証協会等による保証付	466	497
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—
20. 出資等	3,899	3,335
21. 上記以外	3,839	4,544
22. 証券化（オリジネーターの場合） うち再証券化	109	469
23. 証券化（オリジネーター以外の場合） うち再証券化	235	191
24. 複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド） のうち、個々の資産の把握が困難な資産	—	—
合計	93,972	96,440

(単位：百万円)

オフ・バランス項目	平成25年3月31日	平成26年3月31日
1. 任意の時期に無条件で取消可能又は自動的に取消可能なコミットメント	—	—
2. 原契約期間が1年以下のコミットメント	194	88
3. 短期の貿易関連偶発債務	6	9
4. 特定の取引に係る偶発債務 うち経過措置を適用する元本補てん信託契約	3	3
5. NIF又はRUF	—	—
6. 原契約期間が1年超のコミットメント	198	225
7. 内部格付手法におけるコミットメント	—	—
8. 信用供与に直接的に代替する偶発債務 うち借入金の保証 うち手形引受	758	638
9. 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除後） 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除前）	—	—
10. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	121	222
11. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供 又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	173	206
12. 派生商品取引及び長期決済期間取引 カレント・エクスポージャー方式 派生商品取引 (1) 外為関連取引 (2) 金利関連取引 (3) 株式関連取引 (4) その他のコモディティ関連取引 (5) クレジットデリバティブ取引 長期決済期間取引 標準方式 期待エクスポージャー方式	124 124 124 102 0 2 0 17 — — —	139 139 139 109 17 3 0 9 — — —
13. 未決済取引	—	—
14. 証券化エクスポージャーに係る適格流動性補完 及び適格なサービサー・キャッシュ・アドバンス	—	—
15. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—
合計	1,581	1,533

(単位：百万円)

CVAリスク相当額	平成25年3月31日	平成26年3月31日
CVAリスク相当額（簡便的リスク測定方式）	—	209

(2) オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額	4,899	4,666
うち粗利益配分手法	4,899	4,666

(3) 連結総所要自己資本額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
連結総所要自己資本額	100,452	102,850

【信用リスクに関する事項】

(1) 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及び主な種類別の内訳（証券化エクスポージャーを除く）

(単位：百万円)

	平成25年3月31日					
	信用リスクに関する エクスポージャーの 期末残高	うち 貸出金 (部分直接償却後)	うち コミットメント	うち コミットメント、 デリバティブ以外のオフ バランスエクスポージャー	うち 債券	うち デリバティブ
国内	5,013,451	3,578,225	41,502	19,071	785,063	8,180
海外	61,895	—	—	—	61,837	57
地域別合計	5,075,346	3,578,225	41,502	19,071	846,901	8,238
製造業	364,824	329,552	11,430	313	15,404	838
卸売・小売業	226,335	215,060	3,084	1,509	3,815	669
建設業	101,034	84,921	2,931	671	12,066	25
金融・保険業	325,554	133,841	13,550	13,656	163,103	821
不動産業	469,823	430,962	1,928	2,184	34,496	33
各種サービス業	220,420	200,939	5,501	341	9,519	163
運輸業	91,862	78,448	1,350	256	11,661	33
国・地方公共団体	814,802	303,666	—	—	508,387	550
個人・その他	2,460,689	1,800,833	1,726	138	88,447	5,102
業種別合計	5,075,346	3,578,225	41,502	19,071	846,901	8,238
1年以下	861,812	469,340	30,952	2,931	356,679	1,822
1年超3年以下	518,621	331,366	3,794	249	182,590	620
3年超5年以下	462,375	309,330	5,228	81	147,266	468
5年超7年以下	272,287	225,648	—	558	45,800	280
7年超	2,342,411	2,212,952	—	14,895	114,564	—
その他（注）	617,838	29,586	1,526	355	—	5,046
残存期間別合計	5,075,346	3,578,225	41,502	19,071	846,901	8,238

(単位：百万円)

	平成26年3月31日					
	信用リスクに関する エクスポージャーの 期末残高	うち 貸出金 (部分直接償却後)	うち コミットメント	うち コミットメント、 デリバティブ以外のオフ バランスエクスポージャー	うち 債券	うち デリバティブ
国内	5,142,058	3,601,500	29,463	29,586	771,229	2,048
海外	271,003	828	—	—	270,175	—
地域別合計	5,413,062	3,602,329	29,463	29,586	1,041,404	2,048
製造業	373,276	343,402	10,520	1,020	10,817	152
卸売・小売業	244,716	231,855	3,758	1,788	4,500	192
建設業	97,654	84,286	2,903	542	9,609	13
金融・保険業	397,519	152,448	2,500	11,966	227,670	1,028
不動産業	479,800	426,015	1,217	2,274	50,067	10
各種サービス業	248,878	214,225	4,019	256	26,421	152
運輸業	100,850	74,118	1,350	217	25,040	4
国・地方公共団体	934,629	298,913	—	—	630,945	433
個人・その他	2,535,736	1,777,063	3,194	11,521	56,332	60
業種別合計	5,413,062	3,602,329	29,463	29,586	1,041,404	2,048
1年以下	686,793	474,319	19,135	5,556	185,887	1,809
1年超3年以下	730,544	354,325	5,705	72	370,312	128
3年超5年以下	637,533	327,476	2,255	356	307,336	108
5年超7年以下	331,186	255,762	300	12	75,108	2
7年超	2,277,948	2,163,076	182	11,930	102,759	—
その他（注）	749,056	27,368	1,883	11,658	—	—
残存期間別合計	5,413,062	3,602,329	29,463	29,586	1,041,404	2,048

(注)「残存期間別」の「その他」には「期間の定めのないもの」などを含んでおります。

(2) 三月以上延滞エクスポージャーの期末残高

(単位：百万円)

	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
国内	35,610	—	28,085	—
海外	—	—	—	—
地域別合計	35,610	—	28,085	—
製造業	7,922	—	2,781	—
卸売・小売業	530	—	702	—
建設業	1,026	—	738	—
金融・保険業	—	—	—	—
不動産業	3,930	—	3,439	—
各種サービス業	11,609	—	10,654	—
運輸業	567	—	560	—
国・地方公共団体	—	—	—	—
個人・その他	10,023	—	9,207	—
業種別合計	35,610	—	28,085	—

(3) 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金及び特定海外債権引当勘定の期末残高

(単位：百万円)

	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
一般貸倒引当金	28,787	△ 4,405	16,164	△ 12,622
個別貸倒引当金	26,027	10,915	22,759	△ 3,267
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	54,814	6,510	38,923	△ 15,890

(4) 個別貸倒引当金の地域別残高

(単位：百万円)

	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
国内	26,027	10,915	22,759	△ 3,267
海外	—	—	—	—
合計	26,027	10,915	22,759	△ 3,267

(5) 業種別の個別貸倒引当金残高及び貸出金償却の額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日			平成26年3月31日		
	個別貸倒引当金		貸出金償却の額 平成24年4月~25年3月	個別貸倒引当金		貸出金償却の額 平成25年4月~26年3月
	期末残高	期中増減額		期末残高	期中増減額	
製造業	2,064	1,719	3	7,031	4,967	65
卸売・小売業	743	213	102	617	△ 125	240
建設業	2,867	1,417	65	2,809	△ 57	0
金融・保険業	225	2	24	185	△ 40	88
不動産業	10,520	7,576	683	2,320	△ 8,200	498
各種サービス業	7,479	288	520	7,819	339	541
運輸業	134	△ 153	—	150	15	3
国・地方公共団体	—	—	—	—	—	—
個人・その他	1,991	△ 148	3,246	1,825	△ 166	2,547
合計	26,027	10,915	4,646	22,759	△ 3,267	3,984

(6) 標準的手法が適用されるエクスポージャーのリスク・ウェイト区分ごとの信用リスク削減手法勘案後残高及び1250パーセントのリスク・ウェイトが適用されるエクスポージャーの額

(単位：百万円)

リスク・ウェイト	平成25年3月31日			平成26年3月31日		
	外部格付適用	外部格付不適用	合計	外部格付適用	外部格付不適用	合計
0%	—	1,013,366	1,013,366	—	1,208,689	1,208,689
10%	—	335,367	335,367	—	395,521	395,521
20%	29,390	184,260	213,651	36,813	238,483	275,297
35%	—	1,032,875	1,032,875	—	976,716	976,716
50%	125,002	13,958	138,961	183,701	30,030	213,732
75%	—	916,335	916,335	—	964,208	964,208
100%	107,245	990,121	1,097,367	85,383	948,795	1,034,179
150%	4,481	6,668	11,150	—	5,443	5,443
350%	—	—	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—	719	719
自己資本控除	—	719	719	—	—	—
合計	266,120	4,493,674	4,759,794	305,899	4,768,609	5,074,509

【信用リスク削減手法に関する事項】

(1) 信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャーの額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
現金及び自行預金	172,753	362,450
金	—	—
適格債券	950	1,119
適格株式	6,079	6,131
適格投資信託	—	—
適格金融資産担保合計	179,783	369,701
適格保証	34,294	48,623
適格クレジット・デリバティブ	—	—
適格保証、適格クレジット・デリバティブの合計	34,294	48,623

【派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項】

(単位：百万円)

	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	派生商品取引	長期決済期間取引	派生商品取引	長期決済期間取引
イ) 与信相当額の算出に用いる方式	カレント・エクスポージャー方式			
ロ) グロスの再構築コストの額の合計額	3,230	—	3,686	—
ハ) 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額	8,238	—	13,261	—
うち 外国為替関連取引及び金関連取引	5,750	—	9,355	—
うち 金利関連取引	118	—	2,167	—
うち 株式関連取引	1,050	—	420	—
うち 貴金属関連取引(金を除く)	—	—	—	—
うち その他コモディティ関連取引	109	—	105	—
うち クレジットデリバティブ取引	1,209	—	1,212	—
ニ) ロの合計額及びグロスのアドオン合計額からハの額を差し引いた額	—	—	—	—
ホ) 担保の額	—	—	12	—
ヘ) 担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額	8,238	—	13,248	—
ト) 与信相当額算出の対象となるクレジット・デリバティブの想定元本額	20,381	—	20,571	—
うち クレジット・デフォルト・スワップによるプロテクション購入	—	—	—	—
うち トータル・リターン・スワップによるプロテクション購入	—	—	—	—
うち クレジット・オプションによるプロテクション購入	—	—	—	—
うち その他プロテクション購入	—	—	—	—
うち クレジット・デフォルト・スワップによるプロテクション提供	20,381	—	20,571	—
うち トータル・リターン・スワップによるプロテクション提供	—	—	—	—
うち クレジット・オプションによるプロテクション提供	—	—	—	—
うち その他プロテクション提供	—	—	—	—
チ) 信用リスク削減効果を勘案する為に用いているクレジット・デリバティブの想定元本額	—	—	—	—

【証券化エクスポージャーに関する事項】

<持株会社グループがオリジネーターである場合における信用リスク・アセット算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項>

(1) 原資産の合計額等

① 資産譲渡型証券化取引に係る原資産の額

(単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
住宅ローン債権	6,583		5,548	
リース債権	—		—	
不動産	—		—	
合計	6,583		5,548	

② 合成型証券化取引に係る原資産の額

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(2) 三月以上延滞エクスポージャーの額等（原資産を構成するエクスポージャーに限る）

(単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	三月以上延滞エクスポージャー		三月以上延滞エクスポージャー	
		当期損失		当期損失
住宅ローン債権	—	—	10	—
リース債権	—	—	—	—
不動産	—	—	—	—
合計	—	—	10	—

(3) 証券化取引を目的として保有している資産の額及びこれらの主な資産の種類別内訳

(単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
住宅ローン債権	6,583		5,548	
リース債権	—		—	
不動産	—		—	
合計	6,583		5,548	

(4) 当期に証券化取引を行ったエクスポージャーの概略

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(5) 証券化取引に伴い当期中に認識した売却損益の額及び主な原資産の種類別の内訳

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(6) 保有する証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別の内訳

(単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	証券化エクスポージャー	うち再証券化エクスポージャー	証券化エクスポージャー	うち再証券化エクスポージャー
住宅ローン債権	3,467	—	3,467	—
リース債権	—	—	—	—
不動産	—	—	—	—
合計	3,467	—	3,467	—

(7) 保有する証券化エクスポージャーの適切な数のリスク・ウェイト区分ごとの残高及び所要自己資本の額 (単位：百万円)

リスク・ウェイト	平成25年3月31日					平成26年3月31日						
	証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー			証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー				
	残	高	所要自己資本	残	高	所要自己資本	残	高	所要自己資本	残	高	所要自己資本
20%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
50%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
100%	2,748	109	—	—	2,748	109	—	—	—	—	—	—
150%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
350%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—	719	359	—	—	—	—	—	—
自己資本控除	719	719	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	3,467	829	—	—	3,467	469	—	—	—	—	—	—

(8) 証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額及び原資産の種類別の内訳 (単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日				平成26年3月31日				
	証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー		証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー		
	残	高	所要自己資本	残	高	所要自己資本	残	高	所要自己資本
住宅ローン債権	489	—	—	—	429	—	—	—	—
リース債権	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不動産	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	489	—	—	—	429	—	—	—	—

(9) 持株自己資本比率告示第225条第1項の規定により1250パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別内訳 (単位：百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	残	高	残	高
住宅ローン債権	719	—	719	—
リース債権	—	—	—	—
不動産	—	—	—	—
合計	719	—	719	—

(注) 平成25年3月31日は自己資本控除の額

(10) 早期償還条項付の証券化エクスポージャーに関する事項

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(11) 保有する再証券化エクスポージャーに対する信用リスク削減手法の適用の有無及び保証人ごと又は当該保証人に適用されるリスク・ウェイト区分ごとの内訳

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(12) 持株自己資本比率告示附則第15条の適用により算出される信用リスク・アセットの額

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

<持株会社グループが投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項>

(1) 保有する証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別の内訳 (単位:百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	証券化エクスポージャー	うち再証券化エクスポージャー	証券化エクスポージャー	うち再証券化エクスポージャー
住宅ローン債権	1,746	—	1,423	—
リース債権	1,824	—	1,376	—
不動産	8,680	—	3,001	—
自動車ローン債権	—	—	577	—
合計	12,251	—	6,379	—

(2) 保有する証券化エクスポージャーの適切な数のリスク・ウェイト区分ごとの残高及び所要自己資本の額 (単位:百万円)

リスク・ウェイト	平成25年3月31日						平成26年3月31日					
	証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー		証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー		証券化エクスポージャー		うち再証券化エクスポージャー	
	残高	所要自己資本	残高	所要自己資本	残高	所要自己資本	残高	所要自己資本	残高	所要自己資本	残高	所要自己資本
20%	3,301	26	—	—	2,001	16	—	—	—	—	—	—
50%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
100%	8,573	342	—	—	4,378	175	—	—	—	—	—	—
150%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
350%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
自己資本控除	377	377	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	12,251	746	—	—	6,379	191	—	—	—	—	—	—

(3) 持株自己資本比率告示第225条第1項の規定により1250パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別の内訳 (単位:百万円)

原資産の種類	平成25年3月31日	平成26年3月31日
住宅ローン債権	—	—
リース債権	—	—
不動産	377	—
自動車ローン債権	—	—
合計	377	—

(注) 平成25年3月31日は自己資本控除の額

(4) 保有する再証券化エクスポージャーに対する信用リスク削減手法の適用の有無及び保証人ごと又は当該保証人に適用されるリスク・ウェイト区分ごとの内訳

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

(5) 持株自己資本比率告示附則第15条の適用により算出される信用リスク・アセットの額

平成25年3月期、平成26年3月期とも該当ありません。

【銀行勘定における出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項】

(1) 銀行勘定における出資等又は株式等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額及び時価

(単位：百万円)

	平成25年3月31日		平成26年3月31日	
	連結貸借対照表計上額	時 価	連結貸借対照表計上額	時 価
銀行勘定における出資等又は株式等エクスポージャー	76,074		68,880	
うち その他有価証券で時価のあるもの	70,185	70,185	62,852	62,852
うち 時価のない有価証券	5,889		6,028	
うち 子会社株式及び関連会社株式	236		265	
うち 非上場株式	5,652		5,763	

(注) 上記計数は、連結貸借対照表に計上している株式のみを対象としております。

(2) 出資等又は株式等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益の額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
売却に伴う損益の額	5,292	8,357
償却に伴う損益の額	△ 327	△ 3,471

(3) 連結貸借対照表で認識され、かつ、連結損益計算書で認識されない評価損益の額、及び、連結貸借対照表及び連結損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
連結貸借対照表で認識され、かつ、連結損益計算書で認識されない評価損益の額	6,491	4,305
連結貸借対照表及び連結損益計算書で認識されない評価損益の額	—	—

【銀行勘定における金利リスクに関する事項】

銀行勘定における金利リスクに関して持株会社グループが内部管理上使用した金利ショックに対する損益又は経済的価値の増減額

(単位：百万円)

	平成25年3月31日	平成26年3月31日
自己資本額 (A)	248,519	247,822
リスク量 (B)	5,163	10,820
アウトライヤー基準値 (B) / (A)	2.0%	4.3%

(注) 1. 原則、保有期間1年、最低5年の観測期間で計測される金利変動の1パーセンタイル値と99パーセンタイル値により算定しております。

2. コア預金は、要求払預金のうちa) 過去5年の最低残高、b) 過去5年の最大年間流出量を現残高から差し引いた残高、c) 現残高の50%相当額のうち最小の額とし、平均満期が2.5年となるように計算しております。

報酬等に関する開示事項

1. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

(1) 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」及び「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

① 「対象役員」の範囲

対象役員は、当社の取締役及び監査役並びに池田泉州銀行の取締役及び監査役であります。なお、社外取締役及び社外監査役を除いております。

② 「対象従業員等」の範囲

当社では、対象役員以外の当社の役員及び従業員並びに主要な連結子法人等の役職員のうち、「高額の報酬等を受ける者」で、当社及びその主要な連結子法人等の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当社の対象役員以外の役員及び従業員並びに主要な連結子法人等の役職員で、対象従業員等に該当する者はありません。

(ア) 「主要な連結子法人等」の範囲

主要な連結子法人等とは、銀行持株会社の連結総資産に対する当該子法人等の総資産の割合が2%を超えるもの及びグループ経営に重要な影響を与える連結子法人等であり、具体的には池田泉州銀行が該当します。

(イ) 「高額の報酬等を受ける者」の範囲

「高額の報酬等を受ける者」とは、当社並びに池田泉州銀行の有価証券報告書記載の「役員区分ごとの報酬等の総額」と「使用人兼務役員の使用人給与」の合計額に、同記載の「対象となる役員の員数」に数えられる役員のうち、当事業年度内に就任又は退任した役員が当事業年度内の全期間について役員であったとみなした場合に支払うであろう報酬等の額（ただし、就任後又は退任前の報酬等の額と同額）を加えた額を同記載の「対象となる役員の員数」の合計数（ただし、当社並びに池田泉州銀行の両社を兼務する者については、1人として計算してあります。）により除すことで算出される「対象役員年間1人当たり平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

(ウ) 「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」の範囲

「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与える者」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当社、当社グループ、主要な連結子法人等の業務の運営に相当程度の影響を与え、又は取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

(2) 対象役職員の報酬等の決定について

当社では、株主総会において役員報酬の総額（上限額）を決定しております。株主総会で決議された取締役の報酬の個人別の配分については、取締役会に一任されております。また、監査役の報酬の個人別の配分については、監査役の協議に一任されております。

(3) 報酬委員会等の構成員に対して払われた報酬等の総額及び報酬委員会等の会議の開催回数

	開催回数 〔平成25年4月～平成26年3月〕
取締役会（持株会社、池田泉州銀行）	各1回

（注）報酬等の総額については、報酬委員会等の職務執行に係る対価に相当する部分のみを切り離して算出することができないため、記載していません。

2. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の体系の設計及び運用の適切性の評価に関する事項

「対象役員」の報酬等に関する方針

当社は、中長期的な企業価値の向上を通じて、当社の経営方針にもとづいて役員報酬制度を設計しております。具体的な役員報酬制度といたしましては、役員の報酬等の構成を、

- ・基本報酬
- ・株式報酬型ストックオプション

としております。

基本報酬は役員としての職務内容・人物評価・業務実績等を勘案して決定しております。株式報酬型ストックオプションは、業務執行から独立した立場である監査役並びに社外役員を対象外としたうえで、より長期的な企業価値の創出を期待し、一定の権利行使期間を設定し、役員の職位に応じた新株予約権を付与しております。

役員の報酬等は、株主総会において決議された役員報酬限度額の範囲内で、取締役会にて決定しております。

なお、監査役の報酬については、株主総会において決議された役員報酬限度額の範囲内で、社外監査役を含む監査役の協議により決定しております。

3. 当社（グループ）の対象役員の報酬等の体系とリスク管理の整合性並びに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役員の報酬等の決定に当たっては、株主総会で役員全体の報酬総額が決議され、決定される仕組みになっております。

なお、当社（グループ）は対象役員の報酬等の額のうち業績連動部分の占める割合は小さく、また、リスク管理に悪影響を及ぼす可能性のある報酬体系は採用しておりません。

4. 当社（グループ）の対象役員の報酬等の種類、支払総額及び支払方法に関する事項

対象役員の報酬等の総額（自平成25年4月1日 至 平成26年3月31日）

区分	人数 (人)	固定報酬等の総額 (百万円)	基本報酬 (百万円)	株式報酬型 ストック オプション (百万円)	その他 (百万円)
対象役員（除く社外役員）	18	335	320	15	—

(注) 1. 報酬等の総額には、当事業年度において発生した繰延べ報酬15百万円が含まれております。なお、業績不振等に伴い将来取戻しの可能性がある報酬はありません。

2. 当社（グループ）には、変動報酬並びに退職慰労金がないため、記載を省略しております。

3. 株式報酬型ストックオプションの権利行使時期は以下のとおりであります。

なお、当該ストックオプション契約では、行使期間中であっても権利行使は役員の退職時まで繰延べることとしております。

	行使期間
株式会社池田泉州 ホールディングス 第1回新株予約権	平成23年3月16日から 平成53年7月31日まで
株式会社池田泉州 ホールディングス 第2回新株予約権	平成23年9月1日から 平成53年7月31日まで
株式会社池田泉州 ホールディングス 第3回新株予約権	平成24年10月2日から 平成54年7月31日まで
株式会社池田泉州 ホールディングス 第4回新株予約権	平成25年9月2日から 平成55年7月2日まで

5. 当社（グループ）の対象役職員の報酬等の体系に関し、その他参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。